

あさのクリニックを見学して

先日はお忙しいところ、見学の機会を頂き誠にありがとうございました。在宅医療やターミナルケアなど初めて目にすること、初めて知ることばかりで多くの学びを得ることができました。

見学から帰った後に感想を書こうとしたのですが、書きたいことをなかなか整理することができず、時間が経ってしまった後でのお返事となり申し訳ございません。

以下で、見学を通じて感じたことについて2点触れさせていただきます。

まず1点目が、患者さんの生活や（少し大げさですが）患者さんの幸福度に対して慢性期や終末期医療の果たす役割の大きさです。体が衰え満足に動くことのできなくなった高齢の方にとって残りの人生の生きがいや目的はどこにあるのだろう、また高齢者が生きがいを持てるようになるにはどうすれば良いのだろうと以前から思うことがありました。見学を通じてその答えが分かったわけではないのですが、訪問した際に先生やクリニックのスタッフの皆さんに笑顔で感謝の言葉を口にする患者さんやケアの回数を増やすことでターミナルの患者さんが回復の基調を見せることを目にして、クリニックの皆さんの診療が患者さんの生活に活力を与える一端を担っていることを感じました。

2点目が、慢性期や終末期の医療では一人一人の患者さんによってケアの仕方が変わることで、そしてそのような状況では患者さんに関わるスタッフやご家族の果たす役割が大きいということです。患者さんの「病」だけでなく「生活」を診る慢性期の医療では、患者さんの性格やご意向、患者さんを取り巻くご家族の状況などによってケアの仕方が大きく変わることを感じました。そこが、「病」を治療することに、より大きな比重を置き、高額な医療機器への投資や治療の標準化を進める急性期の医療と大きく異なるところだと思えます。慢性期の医療では、逆に、患者さんに応じてケアの仕方を柔軟に変えることが必要で、そのためにスタッフの皆さん一人一人が考えを巡らしながら診療に参加されていたことが強く印象に残っています。（特に、事務スタッフの方々も診療に積極的に参加されていることに、同じ事務スタッフとしてすごいと思いました。）

「こうすれば良い」という正解のない中で、「このようにしたら患者さんのためになるのではないか」と、クリニックの先生やスタッフの皆さんが、訪問看護やホームのスタッフ等関係する方々と連携しながら患者さんの人生の残りの生活を支えていく、そこに創造性を発揮できる余地があり、そこが慢性期医療、在宅医療の仕事の面白さであり、と同時に難しさであると感じました。

急性期病院で働く私自身にとっても、自分の病院が地域医療の中でどのような役割を果たすべきなのか、考えるきっかけとなりました。最後になりましたが、お忙しいところ見学の受け入れにご対応頂きましたこと、重ねて御礼申し上げます。